

氣功の仲間

赤谷慶子

岡崎久彦大使とは父を通じて知り合ひたるにあらずして、六本木のさる會員制の俱樂部にて、始めて知遇を得るの榮に浴す。さは役人を始め辯護士等々多様な人たち集まり、まだその頃は數少なき「ジム」、風呂、サウナ等の完備したりき。レストランもありて、そこへ岡崎さん通ひき。我が同僚夫婦會員にて、誘はれたればこもとも入會するに到る。運動し、サウナより上がりて一同ともに飲みたる時に紹介されき。その頃新聞社を退職し、友人と起業し。程なき頃なりき。毎日午前三時頃まで働き、過勞にて喘息發症す。食事中、咳込みたれば、岡崎さん「ずいぶん深き咳なれど、何ぞ患ふ所ありや」と問ひたまふ。理由説明せし所、すぐ治るよき所紹介せん。ともに赴かむと誘はれたり。豈圖らんや、その頃注目を集めつつありし「氣功」なり。以前より興味あれど、氣功は優れたる先生に師事せずんば障碍あるべしといふ話も聞いてあり、岡崎さん通ひたまふ所なれば案ずるに足らずと思ひて意を決す。

代々木になる沖繩剛柔流の空手道場借り上げ、毎週火曜日に稽古する教室なり。師範はそ博報堂に勤務せる鈴木秀天といふ人なれば、外務・通産の役人多く、博報堂の人たちも多けれど、作家やプロデューサー等も在籍せる。女性はまだ少なく、ダークスーツに身を固めし男性たち殆どなり。總勢二十人餘にて常に稽古しき。代々木道場は、紹介状なくば入門能はざれど、二子玉川の教室はスクール形式なりしかばさほど難しきことはなかりき。週二回の講習を受くるに決め、代々木と二子玉川にて稽古に勵む。有難き事にて喘息は半年にて完治せり。醫師には「おめでたう」、「もはや藥必要なくして、通院無用なり」と言はれ、無常の喜びなり。醫師の術も優れたりけんとは思へど、氣功の効果絶倫なり。この醫師は、故福田起夫元總理の主治醫により喘息の名醫なればと紹介せられたる人にて、三年通院したりき。喘息發症して十年の月日經ち、完治する能はざらんと思はれたれば、喜びもひとしほなり。

週二回氣功に通ふは岡崎さんと吾のみなれど、さらに今一人加はりたり。

梅津睦郎さんとは氣功教室・富士觀會館より櫻新町へ移りし最初の教室にて御挨拶の機會を得たり。脳梗塞起こし、身體不自由なるもいとはず毎週通ひたるその姿に、鼓舞せられたる人は多かりき。梅津さんは松平夫人に強く勧められ稽古することになりし由、後に聞き及ぶ。梅津さんもまた週二回通ふ生徒になりたり。富士通の役員歴任せられし人にて、人人との會話を好みたまへば、面倒見も良き梅津さんすぐに仲間の注目の的となりき。また地元なれば、食事處熟知し、色々なる所案内してもらひき。

梅津さんによれば氣功の稽古後は足スムーズに運び、歩きやすしとの由。従ひて週二回稽古に通ふ甲斐ありとおほせらる。代々木の道場は地下二階なれば、その急なる階段降るるはさぞかし恐怖なりけむと思ふが、なほ通ひておはしましけり。岡崎さんも感ずる所あらせらるが如くにて、常々見事なるものありと賞賛せられてありしこと、今も腦裏を去らず。

梅津さんどういふ譯か、吾を女親分と呼び、疊積み上げ、そこに私座ると似合ふと言ふ。それは牢名主の事なりと思へど、いかなる意味にておほせらるるか、皆目理解に苦しむ所なり。しかも、頻繁にその旨を言ひたまふ。他の人々も興あるが如くなれば、聞き流したり。

昨年の後半にこの大きな存在感ある二人の氣功仲間を失ひき。失ひてより彼らの存在の偉大なりしに氣附きたり。大きな聲にて騒ぐもこの二人なれど、氣功を最も好みたまひしもこの二人なりき。二人とも我夢枕に立ちたまふ事もなければ、必定瞬時の間に成佛せられたりと思はる。合掌。

(平成二十七年四月二十一日受附)